

平成 26 年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：2014年4月～2015年3月

※今年度の年次報告書は担当者の名前、メールアドレス、添付資料を除き、HP等で公表します。また、ユネスコスクールの質の確保の観点から、報告書の内容が一定の基準に満たないもの、報告書が2年連続して未提出の場合には、ユネスコスクールの認定取消を勧告させていただくことがありますので、あらかじめご了承ください。

1. 学校概要

学校名 広島県立呉三津田高等学校

種別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫教育
 中学校 高等学校 中高一貫教育
 教員養成 技術/職業教育
 特別支援学校 その他 ()

住所 〒737-0814
広島県呉市山手1丁目5番1号

E-mail : kuremitsuta-h@hiroshima-c.ed.jp

Website : www.kuremitsuta-h.hiroshima-c.ed.jp

児童生徒数：男子 319 名 女子 302 名 合計 621 名
 児童・生徒の年齢 15 歳～ 18 歳

2. 担当者 ※公表しません

3. 実施活動（複数選択可）

- 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- 国際理解
- 世界遺産
- 平和・人権
- 環境
- 気候変動
- 生物多様性
- エネルギー
- 防災
- 食育
- 伝統文化
- そのほか ()

4. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

- ① 切り抜き新聞作成
社会の諸課題を把握するとともに、解決のための方策を模索した。グループごとに作成した作品を中国新聞「みんなの新聞コンクール」に応募した。
- ② 詩のボクシング
豊かな言語感覚を育むとともに、自ら考え表現する手法を学んだ。
- ③ 読書会
国際問題・環境問題・異文化理解等に関する新書を読んで自ら知識を深めた。その後、グループごとに協議し、読みどころや意見、感想などを発表した。
- ④ ディベート
論題に対する理解を深めるため、専門家の講義を受講した。情報収集及び討議によって、幅広いものの見方や考え方を身に付けるとともに、説得力のある根拠を付して自分の意見を伝える手法を学んだ。
- ⑤ 社会人講演会
「社会と私」をテーマにした社会人講演会から学び、自分と社会との関わりについて分析・考察を試みた。その後、「社会と私」をテーマに小論文を完成させ、クラスで輪読後、優秀作品を学年全体の場で発表した。
- ⑥ 国際交流
呉市の姉妹都市である米国ブレマトン市及び韓国昌原（チャンウォン）市、また、オーストラリアや台湾へ生徒数名が短期留学（夏期研修）し、その成果を文化祭で発表した。
- ⑦ 部活動
ブレマトン市および昌原市からの夏期留学高校生に対し、茶道や書道など日本文化の紹介を行った。また、呉市国際交流協会による「第12回国際交流フェスタ in くれ」に生徒数名が運営ボランティアとして参加し、日本文化の紹介や異文化体験等を行った。また、生徒3名が英語ディスカッションに参加し、「将来の夢」「クール JAPAN」「クール KURE」について活発に議論した。
- ⑧ 姉妹校交流
温州中学（中国浙江省温州市）に、「第12回国際交流フェスタ in くれ」の様子を紹介し、Eメールによる交流を行った。

資料① 切り抜き新聞 本校 HP 掲載記事

1年生 GAYA 中国新聞「みんなの新聞コンクール」

<入選> タイトル「身近に迫る情報流出」

1年2組 宮本優さん、藪本理子さん、吉田恵里奈さん、宮中慧汰くん、渡辺旭くん

代表・宮本優さん

今回、ベネッセの顧客情報流出の事件が報道されたことから、新聞のテーマが決まりました。調べていくうちに、過去にも何度か顧客情報流出事件はあったと知りました。その度に再発防止対策をしているようですが、繰り返し起きています。個人情報の流出は悪用されると命に関わる危険性もあります。もう二度と同じような事件があってほしくない、今回の事件が最後であってほしいという願いを込めて完成させました。

自分たちの思いを相手に分かりやすく伝える文章構成は難しかったですが、協力してまとめることができました。



資料② 詩のボクシング 本校 HP 掲載記事

6月20日(金)「第12回詩のボクシング大会」が開催されました。オープニングでは書道パフォーマンスにより、

「詩のボクシング 響け 我らの言魂」

という力強いメッセージが伝えられました。校長先生の挨拶をスタートに熱戦のゴングが鳴り響きました。



書道パフォーマンス



完成した垂れ幕



校長先生の挨拶

放送部の入場アナウンスとともに、赤コーナー青コーナーにボクサー（朗読者）が入場し、朗読前には各クラス独自の応援が会場全体を盛り上げました。



ボクサー入場



クラス応援



朗読する遠山くん

生徒ジャッジと特別審査員の審査結果により、レフェリーが判定を下し、次から次へと熱戦が繰り広げられました。



うちわをあげるジャッジ



判定をくだすレフェリー



会場の様子

決勝は、3年1組松岡千代之介さんと2年2組丸口咲さんの対戦となりました。決勝戦では、その場でお題を与えられて創作する即興詩対決がありました。広島県教育委員会高校教育指導課高校教育指導係 菊森大治 指導主事からいただいたお題は…

青コーナー：松岡くん「ものさし」 赤コーナー：丸口さん「消しゴム」



朗読する松岡くん



お題の入った封筒を選ぶ松岡くん



即興詩を詠む丸口さん

結果は…

優勝 2年2組丸口咲さん **準優勝** 3年1組松岡千代之介くん、
第3位 3年6組遠山彰くん、2年3組岩谷七海さんでした。

ボクサーたちの熱い対戦に会場は温かい拍手に包まれ、16名のボクサーたちも互いに健闘を称えあいました。

特別審査員の広島県教育委員会高校教育指導課高校教育指導係 菊森大治 指導主事からも絶賛していただきました。



優勝者決定の瞬間



ボクサー全員での記念撮影



菊森指導主事の講評

「詩のボクシング」の3つの目的である、「コミュニケーション能力」「ことばの感性」「クラスの一体感」すべてを高次元で高めあうことができた大会でした。

資料③ 読書会 本校 HP 掲載記事

11月13日(木)と20日(木)に1年生, 19日(水)と20日(木)に2年生が総合的な学習の時間(GAYA)において読書会I, IIを行いました。生徒たちは読書会に備えて1学期末から新書を読み深め, 一人一人が要約文やPOP, 書評を作成してきました。当日はそれぞれの新書について, 班長が中心となってグループで活動を行いました。

読書会新書一覧

1	「小さな政府」を問いなおす
2	テレビが伝えない憲法の話
3	多文化世界
4	悩む力
5	僕らはいつまで「ダメ出し社会」を続けるのか 絶望から抜け出す「ポジ出し」の思想
6	「遊ぶ」が勝ち 『ホモ・ルーデンス』で、君も跳べ!
7	「量子論」を楽しむ本—ミクロの世界から宇宙まで最先端物理学が図解でわかる!
8	ダンゴムシに心はあるのか
9	フェルマーの最終定理
10	越境する大気汚染 中国のPM2.5ショック
11	脳死・クローン・遺伝子治療—バイオエシックスの練習問題
12	ウェブで政治を動かす!



1年生の様子



2年生の様子

1年生は, クラス内で同じ新書毎にグループを編成し, 要約文とPOPを持ち寄って, 互いに感想や意見を述べました。(読書会I)



要約文の読み合い・意見交換



POPの紹介

話し合い後、班の代表作品を決定し、班ごとにまとめた内容をクラス全体に発表しました。(読書会Ⅱ)



クラス内発表



POPの披露

2年生は、書評を持ち寄り、クラスを越えて編成したグループで10の教室に分かれ、互いに書評を読み合い、意見交換をして討論のテーマを決めました。(読書会Ⅰ)



書評の読み合い・意見交換



討論テーマの決定

決定したテーマについて討論を行い、その討論で得た結論を教室内のグループ全体に発表しました。(読書会Ⅱ)



白熱する討論



グループ全体へ発表

読書会の目的は、著者の考えをもとに自分自身の考えを論理的に組み立てる力や他の生徒の意見との共通点や相違点を見つけ自身の考えを深めていく力を養い、社会における様々な事象への理解と意識を高めていくことにあります。これらの活動を通して培った力とともに進路への意識も高め、その実現へとつなげていきましょう。

資料④ ディベート 本校 HP 掲載記事

2月13日（金）公開ディベート大会及び教育研究実践報告会を実施しました。総合的な学習の時間（G A Y A）において2月5日（木）にディベート①、12日（木）にディベート②を実施し、三日目のディベートとなる今回を公開ディベート大会と称して、保護者・関係者に公開し、大学や他校の先生方を講評者としてお招きしました。また新たな取り組みとして、三次高校より2チームに参戦していただき、2年生と対戦しました。今年度の論題は次の通りです。

<ディベート論題>

- ①日本は、積極的安楽死を法的に認めるべきである。（安楽死）
- ②日本は、外国人労働者の受け入れを拡大すべきである。（外国人労働者）
- ③日本は、選挙権を有する年齢を20歳以上から18歳以上に引き下げるべきである。（選挙権年齢）

本校で取り組んでいる教育ディベートは、事前に論題を発表し、大学の先生に講義をしていただく事前学習会を経て、論題に対する十分なリサーチを行い、証拠資料を明示的に用いる論証重視型ディベートに当たります。論題ごとに6～8名の班に分かれ、チーム対抗でディベートを行います。

ディベート①②の様子



尋問



作戦タイム



最終弁論

<呉三津田高校におけるディベートの教育的位置づけ>

4月からの総合的な学習の時間（G A Y A）において、生徒たちは様々な学習活動に取り組んできました。1学期の「詩のボクシング」では自分の思いを表現する力を、2学期の「読書会」では論理的な文章を読み、自分の考えを論理的に組み立てる力を付けることをねらいにしてきました。今学期の「ディベート」はそれらの活動の集大成となります。自分の考えを持ち、論理的に相手に主張し、周囲を説得する力を付けることをねらいとしています。今後は班ごとに論題についてのレポートを作成したり、小論文を書いたりしてディベートで得た思考のまとめを行います。

各教室で次の通り、公開ディベート大会を実施しました。

クラス	論 題	講評者
1年1組	安楽死	広島国際大学 白髪 昌世 先生
1年2組	選挙権年齢	本校全日制課程 松本 雅樹 先生
1年3組	安楽死	賀茂高校定時制課程 奥原 義尚 先生
1年4組	外国人労働者	黒瀬高校 太田 智子 先生
1年5組	外国人労働者	呉宮原高校 西山 光人 先生
2年1組	安楽死	本校全日制課程 長谷川 結城 先生
2年2組	安楽死	本校全日制課程 小河内 修一 先生
2年3組	選挙権年齢	広島女学院大学 戸田 浩暢 先生

2年4組	選挙権年齢	安芸府中高校	加川 橋香 先生
2年5組	外国人労働者	広島国際大学	アンドレアス シェラー先生

公開ディベート大会の様子



立論



作戦タイム



尋問



三次高校との対戦



司会・計時・時間表示・集計が
試合を進行



観戦者はジャッジ

来校していただいた学校関係者評価委員，学校評議員，保護者，他校の先生方，そして講評者の皆様，誠にありがとうございました。今年度は三次高校のチームに参戦していただいたことで，良い緊張感の中，新たな刺激を得ることができました。この大会において生徒たちは，論理的思考力・表現力をいかに発揮し，1・2年生の総合的な学習の時間(G A Y A)の集大成として，ふさわしいディベートを展開することができたと思います。

資料⑤ 社会人講演会 本校研究紀要 掲載記事

<社会人講演会について>

今年度の「社会と私」の社会人講演会は、「生徒が『社会貢献』について新たな視点を得る」ことができるよう，世界規模で活躍されておられる方々に講師をお願いした。その際，生徒達が自己と重ね合わせて考えることができるよう，御自身が高校生だった頃の経験も織り交ぜてお話しくださいようお願いした。いずれの回も，生徒の満足度が非常に高く，小論文において講演会について数多く触れられている。講師の方々が熱意を込めてお話しくださったおかげである。

以下に講演会をお願いした講演者を紹介する。

■第1回目講師 大塚 善久(オオツカヨシヒサ)氏

○青年海外協力隊経験：

マラウイ共和国派遣 村落開発普及員2007年3月～2009年3月

○略歴：約6年間民間企業（自動車業界）の営業マンとして勤務した後に会社を退職し、青年海外協力隊に参加。2007年よりアフリカ南東部に位置するマラウイ共和国のサリマ県において、主に農村地域部の生活向上の為、農産物を通じた現金収入向上に関わる活動（販売技術指導・食品加工・販売促進・新商品開発・運営管理など）を中心に、地域の自立支援を目的としたボランティア活動を行い、2009年に帰国。2011年より2014年まで、JICA国際協力推進員の広島県担当として、広島県内におけるJICAボランティア事業の推進、教育現場での異文化理解・国際理解教育に関する取り組みを行なった。

現在は、広島市内にある環境分析・測定・調査などを行う民間企業に勤め、環境問題だけでなく、海外事業担当者として、アフリカからのフェアトレード商品の輸入・販売、商品開発にも関わっている。

■第2回目講師 白川 美智子（シラカワミチコ）氏

○青年海外協力隊経験：

マレーシア派遣 作業療法士 2008年6月～2010年6月

○略歴：香川出身

1999年～2003年 広島大学で作業療法学を学ぶ

2003年 作業療法士免許取得

岡山の重症心身障害児（者）施設で勤務

2010年10月～現在 NPO法人地域ネットくれんど（呉市安浦町）で勤務

■第3回目講師 高路地 修平（コウロジシュウヘイ）氏

○三菱UFJリサーチ&コンサルティング(株)

○略歴：平成13年3月 広島県立呉三津田高等学校 卒業（第52回生）

平成17年3月 筑波大学 第三学群（社会工学類 都市計画専攻） 卒業

第1回～第3回の「社会人講演会」の講師の方々のお話には、以下の共通点があった。

(ア) 失敗を恐れず、様々な経験を通して学びながら自分の力を高めていくこと

(イ) 様々な価値観を吸収して、多角的なものを見方ができるようになること

(ウ) 自分の「興味・関心」を大切にすること

(エ) 可能性は無限にあること

これらは、GAYAで学び取って欲しい事柄とつながっていたので、生徒達にこれらの共通点を確認させ、社会人講演会のまとめとした。

<小論文について>

小論文は、「私の目指す社会貢献」をテーマに800～1000字で執筆するものとした。テーマは、各教科で学習した内容を横断的にGAYAで活用し、身に付けた思考力・判断力・表現力がいかに社会と関わっていくかを考察する中で、生涯にわたり学習を続ける関心・意欲を喚起することが目的の1つである。このテーマを示したとき、「『社会貢献』って壮大すぎて、イメージがわからない」という声が生徒達からあがるであろうと想定しており、実際にそのような声があった。しかし、社会人講演会の講師の方々に、高校生が『社会貢献』を考えることができるように、身近な例を織り交ぜてお話をしてほしい、と予めお願いしていたことがうまくはたらき、講師の方々のお話によって、「『社会貢献』は決して大きなものだけではなく、まず自分の身近なところから考えることが必要なのだ」という感想が生徒から

出てきたので、ねらいは適切だったと言える。

学年全体会において、最優秀賞を受賞した3年生の小論文を掲載する。

生きづらいつと感じる人のために

私達は誰もがそれぞれ違った心を持っています。“みんな違ってみんないい”はずなのですが、その一方で、ある性質の心を持った人には生きづらい世の中の現状があります。例えば、自閉症やADHDをはじめとする発達障害の人たちです。私は大学では心理学を専攻し、そういった人たちについて深く知りたいと考えています。その後私にすべきことは二つあります。

一つは、そういった、いわゆる心の病に効果的な治療法を探ることです。現在は投薬治療が主になってきていますが、万能薬はいまだに見つかっていません。治療法を開拓し、生きづらいつと感じている人の苦しみを軽減したいと思います。

ですが、そんな治療法はないのかもしれないし、そもそも私は“心の病を治す”という考え方が絶対的に正しいとは思えません。みんな違う心を持っているのに、誰かの心は正常で誰かの心は正常でないのみならずはおかしくはないのでしょうか。例えばアスペルガー症候群の定義については医学界でも意見が割れており、しばしば激しい論争も起きています。現在、日本ではDSM-IVやDSM-Vというアメリカの診断基準を取り入れています、病院によって診断結果が異なることもあります。病気なのか正常なのか、そのボーダーラインは非常に曖昧なのです。本当に必要なのは心の病を治すことではなく、心の病が病でなくなる社会を作ることなのではないでしょうか。

そこで二つ目にすべきことは、これらの人に対する認知度を高めることです。現在、これらの人が生きにくさを感じる原因の多くは、病気に対する周囲の理解の無さに端を発しています。注意を払ったり他人の感情を読んだりするのが苦手なだけに、そのことを理解してくれる人は少なく、社会生活を送るのが難しくなってしまう。また、当人も自分がなぜ人と同じように生活できないのか悩み、自分自身を責めてしまいます。もしも、周囲に正しい知識があれば、対応は変わるでしょう。もしも、自分の心は人とは違う性質を持っていると気付いたら、必要以上に傷つくことはありません。そういった少数派の心を持った人にこそ向いている職業もあるのです。わざわざ合わない環境でせつかくの自分の心を台無しにしてしまう必要はありません。認知度の向上を達成できるように、様々な研究を通して訴えていきたいです。

もちろん、これは社会全体で取り組まなければならない問題であり、心理学の立場からできることは限られています。それでも、私は理解されにくい心を抱えた人達の一番近くに立ちたいと思い心理学を選びました。生きづらいつと感じる人が一人でも減るようにすること、それが私の目指す社会貢献です。

■ブレマトン市

My American family

“Hey!! How are you doing?” 彼女の声にトータル 13 時間の旅の疲れが一気に吹き飛んだ。私も思わず、ハイテンションで“Good!!”と答えた。

去年、ブレマトンからの交換留学生として日本に来ていた Christina (C.C)。学校訪問やバスツアーで仲良くなり、来年は私が絶対に会いに行くと約束した。願いが叶い、運よく呉市の交換留学生に選ばれ、アメリカンのブレマトン市に行かせてもらえることになった。ついにこの日はやって来た。私たちはすぐに意気投合し、私のアメリカでの生活が始まった。

私のホストファミリーはとても優しく親切な人たちばかりだった。気さくで料理上手なホストファザーの Bob, 優しく見守ってくれるホストマザーの Susan, シャイだけど面白いホストブラザーの Kelly, そして私の親友 C.C。広いお家と広い庭。そこには、私の考えていた危険で怖いアメリカはなかった。ホストファミリーには滞在中、毎日のようにいろいろな経験をさせてもらった。

Susan の趣味の陶芸を教えてもらったり、大きなキャンピングカーでキャンプに行ったり、ブレマトン市議会を傍聴したり、日本語の聞こえない中で、夢のような時間を過ごした。

ホストファミリーにお世話になっているお礼にカレーをご馳走しようと作った。「口に合うのかな？」と心配になりながら見ていると、「美味しい!」と言ってくれた。普段はおかわりをしない C.C もおかわりをしているのを見て、本当に嬉しかった。

私の滞在中の目標の一つに、「同世代の意見を聞く」があった。C.C の友達が家に来た時、テレビゲームや映画を一緒に見た。会話をしているうちに日本の同世代と何も変わらないように感じたが、何をすることも自分の意志で決めていて、人に合わず日本人とは違うなと感じた。

アイスクリームを準備してくれていたの、「私も手伝うよ」というと「いや、いいよ」と言われた。そして、いろいろ手伝おうとしていると「ほのかは親切すぎて少し変」と言われた。文化の違いを感じた…。

またあるときは、ホストファミリーが元 ALT の Becky 先生に会うため、カナダに連れて行ってくれた。電車で 4 時間かけて、バンクーバーに到着した。まさかここまで来て Becky に会えるなんて夢にも思わなかった。ショッピングや観光をしたり、夕食を一緒に食べたりして楽しく過ごした。町を歩いていると、怪しい人たちが日本人の私に近づいて、物乞いを始めた。びっくりしていると、Becky や Susan が私を挟み、守ってくれた。その後も私の持ち物を見てきたり、ブレマトンにはいないような怪しい人がたくさんいて、ブレマトンに帰り着くと、3 人ともぐったりと疲れた。

ブレマトンでの一か月いろいろなことがあり、あっという間に過ぎてしまった。私は滞在中一度も帰りたと思ったことはなかった。むしろ、このままずっとここにいたいと思う位だったが、ついに別れの時が来てしまった。空港に行く前に C.C が私にプレゼントがあると伝えてきた。C.C が渡してくれた小さな包みを開けてみると、小さな手作りのマグカップが入っていた。それには、「ほのか 私の妹」と日本語で書かれていた。私は思わず、涙が溢れ出した。

空港に着くと、Susan が手紙を書いてくれていた。Susan は私のことを娘のように可愛がってくれた。溢れる涙をこらえながら、2 人としっかり抱き合った後、日本へと旅立った。

私は C.C と Susan へ最後に感謝の気持ちを、日本語を話すように伝えたいと思った。しかし、“Thank you…”しか出てこず、気持ちを半分も伝えられない自分の英語力不足がもどかしかった。

今までたくさんの先輩方が交換留学を通じて、ブレマトンと呉市を行き来した。私と同じように、アメリカに家族ができた方々も多いだろう。赤の他人の私に本当の家族以上に接してくれたホストファミリー、この感謝の気持ちは一生忘れない。この事業に携わってくださった、国際交流広場を始め、学校の先生方、ブレマトン市議会の方、ライオンズクラブ、関係者の方々には本当に感謝している。

次は、もっと伝わる英語を身につけてアメリカの家族に必ず会いに行きたい。



■オーストラリア My Second Trip

私はこの夏、二回目の海外留学を体験した。

呉市主催の研修で、オーストラリアのケアンズへ一週間ホームステイをするという研修がある。私は中学の頃からこの研修に参加したいと思っていたのだが、抽選に落ちたためやっと参加ができたのが去年だった。研修内容はフライトを除くと実質五日で、オーストラリアの名所を訪ね、アボリジニ文化に触れ、ホストファミリーを含む現地の人と交流するというものだった。

一回目の研修は初めての海外ということから不安も多かったが、この研修を通して世界の広さを知り、今までに無い全てのものに心動かされ充実した一週間を過ごすことができた。しかし、同時に多くの悔いが残り歯がゆさを感じた。

まず上手く話すことができなかった。小・中学校までの勉強で、私は英語が好きで得意だと思っていた。しかし実際に会話に入ってみると、早い、分からない、ついていけないということが何度もあった。聞き取ることができてもどのように返せばいいのかわからないこともあった。特に困ったのは、現地の学校訪問の日だ。その日は一日学校で過ごすのだが、学校の生徒は私たちと年代もしくは年下で、周りの大人はこちらに合わせてゆっくり話してくれるが彼女たちの会話はどうやってもついていけなかった。学校訪問ではその学校の生徒一人が日本人一人についてくれる「バディ」という制度がある。このバディは私たちが分からない事や困ったことがないように、いわばお世話役のようにしてくれるものだった。私は上手く話せずバディの困り顔を何度も見た。そしてもっと話せたらよかったのと思った。ここでの日々は発見だらけで、新しい物の捉え方や考え方を知れ視野を広げることができたが、もっと話して自分の考えを伝えたい、もっと多くのことを知りたいという気持ちが強く残った。

二年生になったそんなある日、母に一枚の用紙を渡された。それは広島県主催の海外留学の要項だった。行き先は前回と同じオーストラリアでブリスベンに十六日ホームステイをするという内容だった。もう一度海外に行きたいと思っていた私は、前回の悔いを無くすためあえて同じ国に行ってみようと考えた。

すぐさま申し込みをしたが、二十人の定員に対して三倍の六十人以上が応募するという競争率の高い研修だった。私は去年のことをまとめた作文を提出し、みごと審査を通過することができた。

今回の主な研修内容は、半分の八日間を現地の学校に通い、州の祝日を含む五日間をホストファミリーと過ごし、残りの三日は飛行機が直通ではなくシンガポール経由だったためフライトに当てられた。研修に参加したメンバーは、県内の高校生で十九校の生徒が集まった。私のホストファミリーはママの一人暮らしで、メンバーの同じ学年の女の子と二人でお世話になった。庭にプールとテニスコートのある大きな家で、私たちはそれぞれ立派な部屋を貸してもらった。驚いたことにママは私たちが通う学校の先生で、休日には先生仲間の家に連れて行ってくれたり、体育の先生と山登りをしたりした。さらにママはチア部の顧問で、練習にも連れて行ってもらった。後から知った話では、その学校のチア部は有名なチームでとても高度な練習を見せてもらえた。

学校は一言で言えばかなり自由だった。日本との違いに戸惑うこともあったがとても楽しむことができた。今回のバディとは上手く話せることができた。私の拙い説明を辛抱強く聞いてくれ、色々なことを話してくれた。風邪をひいて声が出なくなったときはバディの優しさに助けられた。バディとともに受けた授業は、数学、英語、理科、歴史、保健、体育、家庭科、法律、心理学、音楽、ダンス、ドラマ、と様々なものがあるが、どの授業でも生徒と先生の優しさが溢れていてとても楽しい日々だった。

わたしはホストマザーにできるだけ話しかけるようにした。朝の犬の散歩、車の中、料理を作りながら、そして食後のひと時に。話したことは家族のこと、日本の広島のこと、好きなこと、今日の授業のこと、学校であったこと、新しく分かったこと。今思えば当たり障りないたいした事ない内容ばかり。それでも一生懸命話せば、相手はきちんと聞いてくれる。多少単語が分からなくても、時系列が無茶苦茶な英語でも、話した後に返事が貰えることが嬉しくて私が話したことに相手が笑ってくれることが嬉しくて。去年と比べて少しは成長したと思えることが嬉しかった。

この研修の中で素敵な出会いがあった。その人達は広島県の県庁の二人の職員さんで、日本と海外との交流の手助けをしている人達だった。私達が学校に通っている間様子を見に来てくれて、いろいろと相談に乗ってくださった。話をしている内に「少しでも多くの子供が海外に興味を持って欲しくてこの仕事を選んだ。」という話や、「ずっと外国にいるから大変なことも多いが、すごくやりがいのある仕事だ。」という話も聞くことができた。私は二人の姿に憧れ、自分も日本と世界を結ぶ手助けをしたいと思った。

前より視聴した自分を感じられたが、それでももっと話をしたいという気持ちは残った。新たな目標が見つかり、多くのことを学べた。私はこの研修に参加できたことを誇りに思う。今でもホストファミリーがくれる手紙は私に力を与えてくれる。この大切な日々を胸に抱きながら、自分の夢に一歩ずつ近づいていきたい。



■台湾

台湾の人達とのつながり

「あなたに会えなくて寂しいです。」

この言葉が研修を終えて数カ月経った今でも、手紙やメールを通して私に届くことをとても嬉しく思います。今もなお連絡を取り続けている友達こそ、私が台湾で得た一番の宝物です。

この留学は台湾の方のお宅にホームステイしながら四日間の英文研修を主とした五泊六日のプログラムでした。その四日間のうち、一日は観光をして寝食を共にし、三日間は桃園市にある永豊高校が研修場所となり、桃園市各地の高校生と広島の高校生が交流をする研修でした。台湾の学生は、日本への関心が非常に高く、日本のことをもっと知りたいという思いから、私たちに積極的に話しかけてくれました。時には、日本語で話しかけてくれることもありました。彼らのフレンドリーさは、話したくても中々自分からは話しかけられなかった私にとってとても嬉しく、これを機に私は、積極的な行動をとることができるようになりました。一日寝食を共にした日は、夜中の二時過ぎごろまで話の種が尽きま

せんでした。本音で話し、それぞれが自分の思いをはっきり伝えようとしたことで、お互いを理解し合える関係を築けたのだと思います。

しかし、思いを伝えるということは決して簡単ではありませんでした。学校に通う日の初日、私はあるクラスの授業に参加しました。まず初めに自己紹介をしました。そこで、そのクラスの先生に「名前の由来を教えてください。あなたの名前の『笑』には smile という意味以外にどのような意味が込められているのですか。」と聞かれました。私は一生懸命説明しようとしたのですが、中々難しく、上手く説明することが出来ませんでした。おそらくその教室にいた先生と生徒は私の話が理解できなかったのだと思います。教室が静かになり、私の声だけが響いていた時は、本当に恥ずかしく、台湾に来て早々、大恥をかいたと思いました。このこと以外にも友達に「日本の選挙や政治はどのような制度なのですか。」と聞かれた時は、頭をひねりました。ですが、このように私が困った時に、後ろから何らかの形で私を支えてくれたのが、台湾の友達でした。私の説明が上手くいかず、教室が静かになった時、相槌を打ってくれた子・私の方を見て微笑んでくれた子。また授業が終わった後、私の名前を言い名前だと言ってくれた子、それぞれが私に対し、心配りをしてくれました。

このような経験を通して私は台湾の人々の温かさ・優しさに触れることが出来ました。また現在、台湾ではグローバル化として、英語を幼稚園児から、第三言語(日本語が主)を高校生から学んでいます。そのため、私達日本の学生より他国に対しての関心が強いと感じました。この学んだことをふまえ、これからはよりいっそう英語の勉強に励みたいと思います。

最後に、この留学はたくさんの方の協力があったのものでした。留学を薦めてくださった先生方、ホームステイを快く引き受けてくださったホストファミリー、添乗員と広島県教育委員会の方、家族に心から感謝しています。

資料⑦ 部活動 本校 HP 掲載記事

アメリカ ブレマトン市 交換留学生来校

7月28日(月)、アメリカ ブレマトン市からの交換留学生3名が本校を訪問しました。生徒会執行部と英会話部が案内役を務めました。まず、放送部制作の DVD を使って、学校行事や部活動の様子を映像で紹介しました。続けて、生徒会執行部が、GAYA や詩のボクシングについて英語で説明し、三津田高校についてよりよく知ってもらうことができました。

その後、書道部員の協力で書道体験を行いました。留学生たちは「調和」や「柔道」、「合気道」など、好きな日本語をうちわに書き、楽しそうな様子で取り組んでいました。さらに、茶道部では、和の空間の中で日本の伝統文化を体験してもらいました。慣れない正座で、足がしびれた留学生もいたようですが、頑張って挑戦していました。他にも、弓道部、チアリーディング部などを見学し、交流を深めました。

お土産として、ABCDE のデザインされたクリアファイルを渡しました。三津田スピリットが「呉から世界へ」伝わったと思います。

短い時間でしたが、本校について深く知ってもらうことができ、お互いに楽しい経験をすることができました。



資料⑦ 部活動 生徒の感想

第12回国際交流フェスタ in くれ

私たち英会話部は2月22日に行われた「国際交流フェスタ in くれ」に参加しました。ALTのKathryn先生はステージ上で言語学習について日本語でスピーチされました。とても聞き取りやすい日本語で話されていました。英会話部は毎年日本文化を紹介するブースを出していて、今年も折り紙などの日本の遊びを紹介したり、絵馬に夢を書いてもらって飾ったりしました。また、新企画として高校生による英語ディスカッションが行われました。三津田、広、宮原の3校が参加し“My dream”, “Cool Japan”, “Cool Kure”のテーマについて意見を出し合いました。観客も参加する形で行われたので、とても楽しく有意義な時間を過ごすことができました。

今回のフェスタ全体を通して、様々な国の人々と交流し、意見を交換したりする機会を持つことができました。これからも広く世界に目を向けて、このような行事に積極的に参加していきたいです。



資料⑧ 姉妹校交流

■1年生

I spent quality time with local residents and many foreigners. Our ALT Kathryn made a speech about language learning in Japanese. I was so impressed by her speech. English club's members set up a booth to introduce Japanese culture, for example, Origami, Ema and so on. I joined the English discussion with my two seniors. We discussed “My dream”, “Cool Japan”, and “Cool Kure” with Hiro High School students and Miyahara High School students. I had a great time. I want to actively join more events like this.

■2年生

I enjoyed the Festa very much. The discussion was very interesting because I could listen to students' and foreigners' opinions about Japan. When I was in the discussion, I thought the Japanese language was one of the cool points. We use hiragana, katakana, and kanji, and it's difficult even for Japanese to explain how different one is from the others. I think it's interesting and cool. I have a little regret because I could hardly speak with foreigners. But I enjoyed it as a whole and I want to be more positive if I go next time.

